

一 般 演 題 抄 錄

23. 子宮頸癌, 卵巣癌における増殖相細胞割合と放射線療法及び化学療法の治療効果との関連性

南 條 亨 渡 部 洋 澤 井 猛

池 田 正 典 野 田 起 一 郎

近畿大学医学部産科婦人科学教室

癌組織における増殖相細胞割合 (growth fraction: GF) は放射線や抗癌剤を用いた悪性腫瘍に対する治療効果及び予後と密接な関連性を持つことが示唆されている。そこで今回、我々は婦人科癌 (子宮頸癌, 卵巣癌) における、放射線療法及び化学療法の治療効果と GF, DNA ploidy の関連性について検討を行った。まず、基礎的検討として、新鮮凍結検体を用いた PCNA 抗体, Ki-67 抗体それぞれの標識率の関連性を、つぎに新鮮凍結検体とパラフィン包埋検体を用いたそれぞれの PCNA 抗体標識率の関連性を検討し、パラフィン包埋検体を用いた PCNA 抗体の有用性について検討した。次に臨床的検討として、放射線単独治療を行った子宮頸癌症例21例, 初回手術時、腫瘍の完全摘除が不能で、術後 CAP 療法 (CDDP 50 mg/m², ADM 40 mg/m², CPA 300 mg/body) を施行した卵巣癌症例47例における放射線療法及び化学療法の直接効果と GF 及び DNA ploidy との関連性について検討を行った。さらに、GF と長期予後との関連性について、Kaplan-Meier 法を用いて検討を行った。その結果、1. 同一症例での新鮮検体を用いた Ki-67 と PCNA の標識率には相関係数0.93と高い相関性が認められ ($p < 0.01$)、さらに同一症例での新鮮検体とパラフィン包埋検体を用いた場合の

PCNA の標識率にも相関係数0.95と高い相関性が認められた ($p < 0.01$)。以上より GF の検討に PCNA は有用であり、パラフィン包埋検体を用いたretrospective study への応用は可能であると考えられた。2. 子宮頸癌において、40 Gy 未満の放射線線量で大星・下里分類の Grade 4 に至った症例の GF は、40 Gy 以上要した症例の GF と比較して有意に高い傾向を認めたが ($p < 0.01$)、DNA aneuploid 症例の頻度は両者間に有意差は認めなかった。また、GF 35% 以上の症例は GF 35% 未満の症例に比較して有意に予後良好な傾向を認めた ($p < 0.01$)。3. 卵巣癌において、CR 群の GF は PR・NC・PD 群の GF に比較して有意に高い傾向を認めたが ($p < 0.05$)、DNA aneuploid 症例の頻度は両群間に有意差は認めなかった。また、GF 35% 以上の症例は GF 35% 未満の症例に比較して、予後良好な傾向を認めた。

以上より、PCNA を用いた免疫組織染色による GF の測定は、子宮頸癌Ⅲ・Ⅳ期症例における放射線療法、及び卵巣癌Ⅲ・Ⅳ期症例における化学療法の直接効果と予後を推測するための重要因子の一つとして有用であると考えられた。